



2022 年 3 月 2 日

## 企画書

### 1. 名称

聴覚障害者支援アプリケーション signers (サイナーズ)

### 2. 開発担当者

代表・企画立案 札幌 DEV4 期 那珂 慎二

開発パートナー 札幌 DEV4 期 諏訪 実奈未

### 3. 目的

遠隔手話通訳プラットフォームを主とした、聴覚障害者支援アプリケーションの開発

### 4. 概要

現在、福祉サービスとして、全国各地のろうあ協会・聴覚障害者協会を通じて全国の地方自治体より提供されている手話通訳派遣について、制度・方法ともに新たな仕組みを導入し、手話通訳者不足の問題解消を目指すプラットフォームの開発を行う。

### 5. 詳細

現状、基本的に手話通訳者の派遣現場は所属する行政区内に限られており、活動範囲が狭い。手話通訳報酬の対象となる派遣現場の母数が少ないため、その収入だけでは生活ができず、本業をしながら通訳活動に従事している。

一方で、手話通訳を必要とする聴覚障害者は医療や行政、教育に関する通訳申請を希望することが多い。当然、平日日中の通訳が主となるが、本業をしている手話通訳者は平日仕事があるため、週末の通訳活動がメインとなり、その結果派遣申請に応じるのが難しく、専従手話通訳者や、日中活動が可能な一部の登録手話通訳者が大量の派遣申請に対応せざるを得ず、その負担は計り知れない。

そこで、対面・同行が必要な通訳現場についてはこれまで通りに地方自治体提供の手話通訳派遣を行うということを前提とした上で、昨今増加している遠隔でのビデオチャットなどを利用した手話通訳が可能な場合には、全国区を管轄する省庁や団体からの通訳派遣という仕組みを導入することで、手話通訳者側の活動範囲を全国に拡大し、手話通訳報酬のみで生活ができる環境を構築するという新たな仕組みの導入を提案する。そうすることで手話通訳者側には手話通訳を本業とするという選択肢が増え、平日日中に活動に従事す

る通訳者が増加することで、聴覚障害者側にもより充実した情報保障の機会が与えられるのではないかと推察する。

課題として、全国区での通訳となると、手話方言や年齢層ごとの表現の違いをより繊細に意識した派遣コーディネーターが必要となる。そのため、表現スコアや利用者評価スコアを基にした AI 判定を導入し、手話表現が聴覚障害者に対してより正確に伝わるための工夫を行う。

## 6. 開発言語（予定）

|      | フロントサイド  |                | サーバーサイド    |
|------|----------|----------------|------------|
|      | 利用者（スマホ） | 管理側（PC・タブレット）  |            |
| MVP  | React    | PHP・JavaScript | PHP        |
| 最終目標 | Swift    | PHP・JavaScript | PHP・Python |

## 7. その他

那珂は以前、公益社団法人札幌聴覚障害者協会 手話通訳派遣室で事務職として勤務していました。また、妻は聴覚に障害があり、手話でコミュニケーションをとっています。私は手話通訳の資格は持っていません。

手話通訳の現状について触れると、札幌市の委託による手話通訳派遣については年間申請数が 4000 件ほどありましたが、それらのほとんどが平日日中の派遣を求めるものだったのに対し、札幌市登録手話通訳者およそ 60 名のうち平日日中に対応できるのは 25 名ほどだったため、申請に対応できる通訳者確保がかなり困難で、中には通訳派遣をお断りせざるを得ないという事例もいくつも目にしてきました。

手話通訳申請は聴覚障害者の生活・福祉・情報保障に直結するため、申請数を減らすことはできません。こうした問題を解決するためには、通訳者がもっと手話通訳に従事しやすい環境を整え、現在資格を持ちながらもそれを活かすことができていないという根本的な問題に取り組む必要があると感じました。

これまで、遠隔手話通訳はあまり行われていませんでしたが、新型コロナウイルスまん延に伴い、約 2 年前から徐々に根付いてきた新たな方式として認知が広まり始めています。ただし、いまだに遠隔手話通訳の派遣については、方法がまだ確立していないのが現状です。この機会を活用して、手話通訳者の活動範囲を広げるように提案し、聴覚障害者の情報保障の向上に加えて、手話通訳者が抱える問題の改善・解消を国・自治体・関係団体に訴えたいと考え、今回の企画に至りました。